

「キジの親子(1)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

北軽井沢にはキジが多い。キジは我が国の国鳥であるが、狩猟の対象にもなっていて、許可を得れば猟銃で撃つこともできる。ただし、撃つことができるのはオスの成鳥だけで、それも時期や区域が限定されている。私の山荘周辺でも、秋になると猟銃を持った人を見かけ、時々森の奥から銃声も聞こえる。



昨実、車で牧草地脇の町道を通ったら、草から顔だけを出している鳥らしきものが見えた。キジだろう。



車を低速で移動させて、そっと近づいて撮った一枚。やはりキジのオスだった。繁殖期が終わろうとしているので、春に見た時よりも顔の赤さが目立たない。私が車ごと近付いても、一向に逃げようとしな



それどころか、ゆっくりと向きを変えて、車のほうへ近づこうとする動きも見せた。時折私のほうを見ている。明らかに「自分のほうに注意を引きつけている」という行動のように見えた。近くに巣でもあるのだろうか？この町道は、奥に私の山荘を含めて5軒しか民家がないので、車も歩行者もめったに通らない。私はエンジンを停めて、しばらく観察してみることにした。



数分後、静かな気配に安心したのか、牧草の間からもう一羽の鳥が現れた。キジのメスである。さきほどのオスよりも一回り小さく、羽色も茶色で非常に地味である。恐らく番(つがい)であろう。しかしメスは牧草から顔を出したまま、周囲を警戒し、なかなか動こうとしない。よく聞くと、牧草の中から「ピヨピヨ」声が聞こえる。雛がいるのだ。メスは虫の多い牧草地に雛を連れてきていて、道の反対側の森にある巣に帰ろうとしていたようだ。オスが私の気を引こうとしたのは、このメスと雛がいたからだろう。